

ブータンにおける初等教育の素描： 小学校とNAPEプログラム

松沢哲郎¹⁾、辻本雅史²⁾、池上哲司³⁾、成瀬哲生⁴⁾、出水明⁵⁾

1) 京都大学霊長類研究所、2) 京都大学教育学部、3) 大谷大学文学部
4) 山梨大学教育学部、5) 喜多病院

ブータンの学校と医療の現場を見て歩いた。本稿では、フィールドワークによる実地の見聞と文献資料をもとに、ブータンにおける初等教育の現状を素描したい。また、こうした試みを通じて、教育をフィールドで調査するという現場主義的研究のねらいと方法と意義を考えたい。ブータンでは、仏教を背景とした伝統的な暮らしを守りつつ、王制という中央集権的な政治形態が、海外援助による近代化・国際化を制御しつつ押し進めている。学校教育の場でも、宗教的・伝統的な暮らしを背景に、強い近代化への意欲をもって教育がおこなわれている。主要な教科は国語（ゾンカ語）・英語・算数の3教科とEVSと呼ばれる環境教育を加えた4教科である。子どもたちの向学心ならびに親の世代の教育への志向は高いと感じた。1986年以降、ブータンの初等教育の基本はNAPE（ネイプ）と呼ばれる教育プログラムに依拠している。これまでほとんど知られていない、この発展途上国における教育プログラムの実践のようすを、今回の実地調査で見聞することができた。学校の現場とネイプ・プログラムの発想を中心に、ブータンの初等教育を素描する。

1 はじめに：教育学におけるフィールド研究

「教育」、「環境」、「文化」、この3つをキーワードとして、ヒマラヤ地域の異なる自然環境のもとで、文化的な伝統を守って暮らしている人々の教育への取り組みを、フィールドワークという手法で実地に見聞してきた。

1993年の調査では、パキスタン北部山岳地帯のフンザ地域に住むワヒー族と、その北隣の中国・新疆ウイグル自治区領のパミール高原に住むキルギス族の暮らしを見た（松沢、1994a；辻本、1994ab）。1994年の調査では、中国雲南省に住むモンゴル族の暮らしを見た（松沢・成瀬・池上。辻本、1994）。1995年の今回の調査では、ヒマラヤの小国ブータンに焦点を当てた。

それぞれの地域に固有の文化は、親の世代から子の世代へと、教育と学習を通じて引き継がれていく。では、どのような教育があり、どのように学習しているのだろうか。個々の文化の実態を肌で感じながら、教育と学習のありさまを理解したいと思っている。

1993年のパミール高原周辺、1994年の中国雲南省の調査に続く、今回1995年のブータンでの調査で、3年間にわたるヒマラヤ辺境地域の教育と文化にかんする比較研究がひと区切りを迎える。これまでの調査を踏まえうえて、ブータンにおける初等教育の実態を素描しつつ、教育のフィールド研究への展望を述べたい。

2 ブータンという国

ブータンはヒマラヤにある小さな国である。緯度で言えばほぼ沖縄にあたる。大きさは47,000平方キロで、ほぼ九州に相当する。握り拳のような楕円形をした国だ。北は、中国領であるチベット自治区。南、西、東の三方はインドに接している。

自然環境は、南から北へ3つのゾーンに分けることができる。南部は、インド平原の低地に続いている。中央部は、ほぼ南北に縦貫する谷筋に耕地が開けている。北部は、ヒマラヤの山岳地帯で、ブータン・ヒマラヤの最高峰ガンケルプンツム（7541m）をはじめとした7000m峰がそそり立つ。

北に越えればチベット高原である。

人口は1990年で公称約64万人と言われている。国連加盟時には国を大きく見せるために人口も公称百万以上とされたが、実際にはそれほどはいないようだ。多民族国家だが、主体はチベット系の住民で、ゾンカ語と呼ばれるチベット語系のことを話す。南の方の地域にはネパールから移住してきたネパール系住民が多い。公用語はゾンカ語と英語とネパール語。通貨はヌルタム。日本との時差は3時間遅れである。

立憲君主制で、王様がいる。現在のワンチュク王朝は、そんなに歴史が古いわけではない。今世紀のはじめに現王室が国内統一を果たしてから、現国王ジグミ・シン・ワンチュクで4代目である。この王室に対する国民の敬愛は深く、まだ若く栄邁な現国王に対する国民の人気は高い（Dorji, 1995; The Department of Tourism Royal Government of Bhutan, 1979; 西岡・西岡, 1978）。

3 ブータンにおけるフィールド調査の歴史的背景

日本人にとって未知だったこの国をわれわれに初めて知らせてくれたのは、中尾佐助氏の著作「秘境ブータン」である（中尾, 1959）。中尾氏は、1958年5月から11月にかけてブータンに単身入り、植物学・文化人類学の調査をした。彼の名を高らしめた「照葉樹林文化」という着想がこの旅から生まれた。ブータン探検の歴史を開いた旅だと言える。

振り返ってみると、この1958年という年は、京都大学が「探検大学」と呼ばれるにふさわしい実体を初めてもちえた、記念すべき最初の年だったと言える。まず、その前年から南極大陸に出ていた西堀栄三郎を隊長とする日本の南極越冬隊が、初めて越冬を成し遂げて3月に帰国して、1958年が明けた。

今西錦司と伊谷純一郎の両名が、ゴリラの調査を目的に初めてアフリカ大陸に渡った。日本の霊長類学における海外調査の始まりであり、世界に先駆けた野生の大型類人猿の生態研究だった。その研究の進め方はヒマラヤ登山の進め方と瓜二つである。山登りと霊長類学は、今西の産んだ双生児のきょうだいだといえる（松沢, 1992）。

そしてこの1958年、桑原武夫を隊長とする京都

大学学士山岳会（AACK）の隊が、カラコルムのチョゴリザ（7654m）に初登頂した。京大が送り出した遠征としてはこれ以前にアンナプルナがあるが、頂上直下で強風のため撤退した。このチョゴリザが、京大にとってヒマラヤ登山の最初の成功である。以後、たくさんの遠征隊がヒマラヤに出た。

前述の中尾のブータンとほぼ同時期に、川喜多二郎らは西北ネパールの調査をした。「鳥葬の国」という著書にまとめられたこの生物学・人類学の調査は、のちに川喜多のKJ法と名づけられた発想法・整理法を産むフィールドワークの旅でもあった。

奇しくも1958年という同じ年に展開したこれらの「探検」は、地理学的にも未踏の地をゆくものだった。また世界的なレベルでみた学問の世界で評価しても、当時、それぞれがバイオニアークとしての価値を持っていたといえる。未知の地域に到達すること、それ自体が冒険であり、知的好奇心を満足させた。今西・桑原・西堀ら「花の昭和3年組」と呼ばれる世代とその直接の門下生たちが、戦前から温めていた志を高く保ち、日本の戦後の復興と軌を一にして世界に羽ばたいた時期である。横道にそれた話をここで終わろう。

閑話休題。フィールドワークによるブータンの調査史を続ける。ヒマラヤ各地に登山や学術調査を目的とした遠征隊が派遣されたが、その中でもブータンは比較的最近まで「秘境」として残された数少ない場所だった。それは、ブータンが当時とっていた鎖国政策による。ブータンの国連加盟は1971年に申請され、正式に実現したのは1972年でしかない。

それ以前の1969年、まだ入国がきわめて厳しい時期に、京都大学では桑原武夫を総隊長とするブータン遠征隊が組織された。松尾稔を隊長とし、現役の学部生も3人含んだ、中尾佐助以来の本格的な学術調査隊である。内陸国でかつては陸路しかなかったため、インド政府の北方地域通過許可（インナーライン・パーミット）がないとブータンに入国できなかった。1969年の隊は、インドのカルカッタで40日間も足止めされた。インドの許可がおりずブータンに入国できなかったのである。このときの辛苦の調査のようすと学術研究の

成果は、「ブータン横断紀行」(桑原、1978)という本にまとめられている。

現在では、いきなり空路で、タイのバンコック、ネパールのカトマンズ、バングラデッシュのダッカ、インドのカルカッタの4都市から、ブータンのパロに直接入ることができるようになった。ブータンは、今なおツーリストの入国を「基本的には団体旅行で、国が認可したブータンの旅行社に限定」している。とはいえ、年間およそ3000-4000人もの観光客がこのヒマラヤの小国を訪れるようになった。もはやティンブー、パロ、プナカといった都市やその幹線道路沿いの地域に、「秘境」ということばはふさわしくない。最近のブータンのようすは、以下にあげた多くの一般書からうかがい知ることができる(今枝、1995;石田、1993;小松、九里・林、1995;山本、1991)。

1958年の中尾佐助による調査以来、京都大学の関係者をはじめ少なからぬ研究者によってブータンでのフィールド調査がおこなわれてきた。文化人類学的な調査、生業構造にかんする調査、社会制度や政治の動向にかんする調査、生業資源の調査などから、ブータンの人々のくらしのようすが学術的に解明されつつある(堀、1992;河合、1994;栗田、1986;1992;1996、月原、1992)。

しかし、国内外の文献を調べてみても、ブータンの教育にかんする研究調査はほとんどといってよいほど見あたらない。日本語で現在手に入る最も良質なブータン案内書である今枝(1995)の本でさえも、教育にかんする記述は2ページ弱でしかない。ヒマラヤの小国として同じような位置をしめるネパールについては、学校教育に深く言及したり(古川・結城、1996)、学校教育そのものを論じたフィールド調査がある(村上、1993)。ところがブータンについては、首都ティンブーでの子どもの生活の写真(小松、1986)と、海外青年協力隊で赴任している日本人教師の短い随筆(岩本、1995)が、かろうじて現場の雰囲気伝えてくれるにとどまっている。

今回の調査で事前に手に入れられた最も信頼できるしかも詳細な報告は、ブータン王国政府の発行している「第7次5カ年計画、1992/93—1996/97」(Planning Commission Royal Government of Bhutan, 1991)だった。この「7FYP」と略称す

る政府の国勢全般と将来の指針にかんする白書が、ブータンの教育をうかがい知る唯一の窓口だった。しかし、こうした網羅的な概説の記述からは、実際の教育の生き生きとした実態は浮かんでこない。ぜひその教育の現場で、教師や生徒の声を聞き、顔を見、たちのぼる匂いをかいで、教育の実態を知りたいと願った。

4 首都ティンブーへ

11月上旬、季節はずれのサイクロンがバングラデッシュを泥の海にした。そのまま北上して、ヒマラヤの山々に雪を降らせた。ネパールのゴークョ・ピークで日本人トレッカーが雪崩にあって大量遭難した。ブータンのパロの空港も気温1度で雪。ドゥルック・エアー(ブータン唯一の航空会社)は、両翼に双発のエンジンをもったBAe146-100型機を2機だけ保有している。この悪天では、超小型のジェット旅客機は、ブータン・ヒマラヤの内懐に抱かれた形のパロの谷間の空港に降りることができない。バンコック発の飛行機はついにカルカッタで足止めされた。ブータン国王の誕生日のパレードを翌日に控え、みすみすそれに立ち会う機会を逃すはめになった。

カルカッタは人口1千万を越えるインドの大都市である。全員で、タクシーに乗って市内見物にでかけた。人、人、人、人、人、人……どこを見ても人だらけである。自動車、自転車、人力車、大八車、牛、右から左から押し合いへし合い。これはすごい。

カルカッタで思わぬ一晩を過ごしたその翌日、飛行機はブータンの玄関口パロについた。

さらにパロから車で2時間かけて首都のティンブーに向かった。ティンブーは、カルカッタとは好対照で、静謐な山あいの街である。しかし書物の写真で見慣れた風景と較べると、ずいぶんと家が多い。最近、新築ラッシュで、もう谷沿いの平坦な土地がないように見える。現在では、約3万から4万人の人口というから、狭い谷間に人がぎっしりという感じである。

5 ブータンの学校制度

ブータンでは学校と病院を見てまわった。家庭と学校、この2つが文化的伝統を支える場である

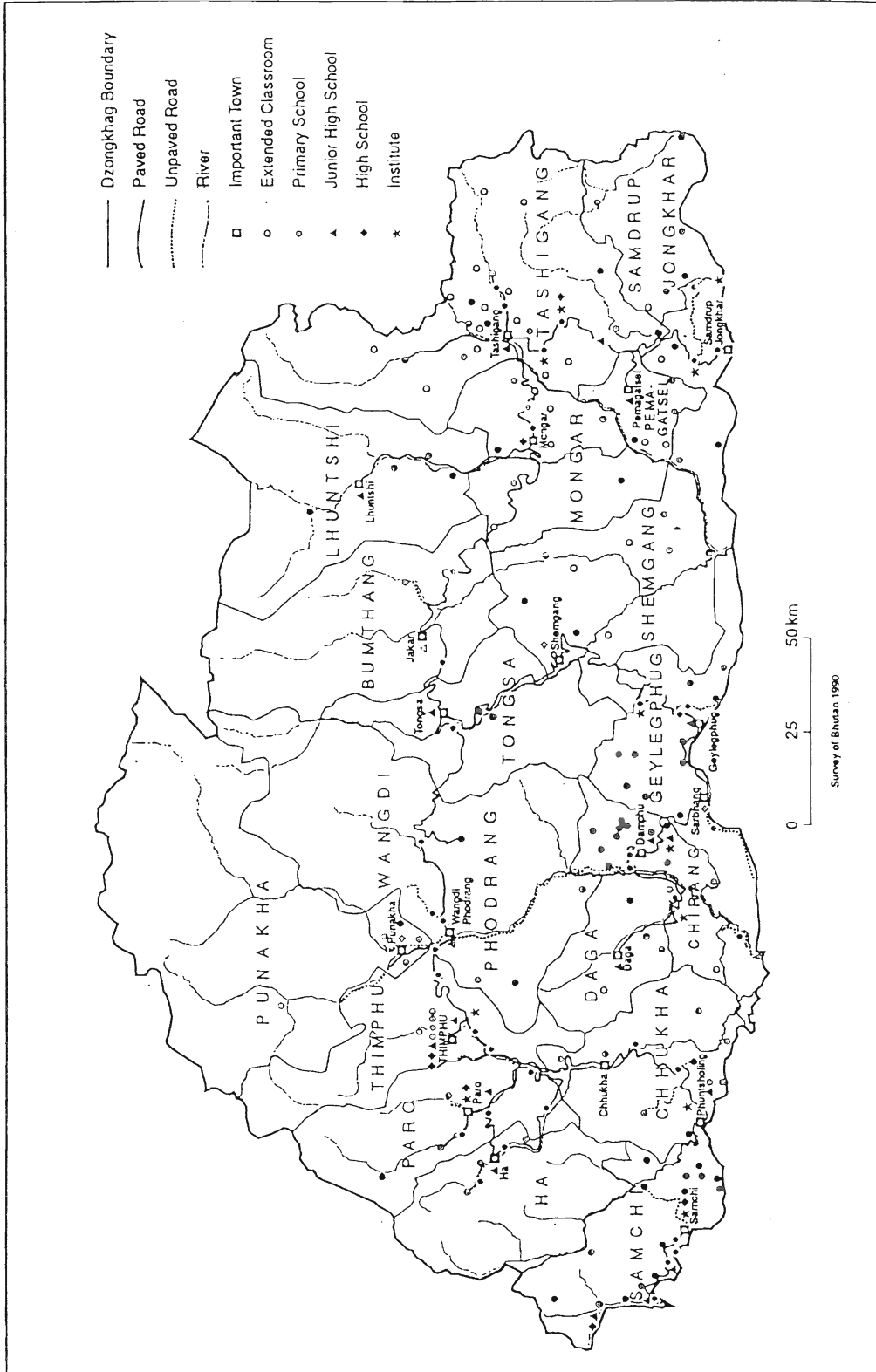


図1 ブータンの学校・教育機関の分布 (Planning Commission Royal Government of Bhutan, 1991より引用)

ことはまちがいない。しかし短期間の調査で家庭に入りこむのはむずかしい。そこで事前に立てた案が、フンザや雲南と同様に、学校とくに初等教育に焦点をあてたフィールド調査だった。これなら、人をつくる教育という国の基盤と、そこで重視されている徳目や将来像がわかる。出発前に、ブータン政府が発行している年次計画案「7 F Y P」を手に入れて予習していった。この文献には、学校教育についても、過去と現状が総括され、統計資料が公表され、近未来の計画が述べられている。

ブータンの学校教育で特記すべきことは、小学校から大学まですべて無料だということである。ついでにいうと医療費も無料である。この点だけに限って言えば、高福祉国家が実現されている。第7次案にかぎらず、さらにさかのぼっても、教育は国の重点施策のひとつで、つねに国家予算の約1割程度を占めてきた。

先に結論を言うと、フィールド調査の結果から、ブータンの初等教育を理解する鍵となるのはN A P Eだということがわかった。「ネイプ」と発音する。"The New Approach to Primary Education in Bhutan"の略である。このネイプにかんする詳しい著作(Collister and Etherton, 1991)を手に入れ、その内容を理解して、はじめてフィールドで体験したブータンの初等教育の全体の輪郭が見えてきた。

以下の論考では、上記2つの文献資料(第7次5カ年計画:7 F Y Pと、ネイプにかんする解説書)を下敷きに、コミュニティー・スクール(地

域学校)、プライマリー・スクール(小学校)、ハイ・スクール(高等学校)を実際に見て回った経験を踏まえて、ブータンの初等教育の過去と現状を検証し、将来を展望したい。

まずブータンにおける学校教育の歴史を振り返ってみよう。ブータンはチベット仏教の流れを汲む敬虔な仏教徒の支配する国である。首都ティンプーにある国王の住居タシケ・ゾンは、国王一家の住居であると同時に多数の僧侶の住む僧院であり、そしてゾン(ゾンカ語で「城」の意味)という名のとおりに巨大な城郭でもある。かつてのブータンでは、体系だてられた教育は仏教であり、教育は仏教を学ぶことだった。したがって何世紀にもわたって、主に僧院が学校だった。それは男子のみの学校教育だとも言える。

文献的には、1914年に、時の首相が主導してブータン初の学校が設立された。そうした散発的な例はその後も続くが、いわゆる西欧的な学校教育がブータンで始まったのは、せいぜい1950年代にしかさかのぼれない。近代的な学校教育が導入された国としては、きわめて最近に位置する稀有な事例といえる(Collister and Etherton, 1991)。

1959年の統計によると、全国の学校数が59校、生徒数は1500人だった。それが1990年の統計(表1)では、全体で245校、約7万人になっている。初等教育の就学率は約67%である。ただし、これは6歳から12歳までの就学年齢児童の数を104,000人と見積もった場合の数字である。正確な人口が把握できないので、就学率については何とも言えない。いちおう1990年において約67%の

表1 ブータンの1990年における学校数、生徒数、教師数

| 学校/教育機関 | 学校数 | 生徒数 | | | 教師数 | | |
|---------|-----|-------|-------|-------|------|------|------|
| | | 男子 | 女子 | 合計 | 自国人 | 外国人 | 合計 |
| 地域学校 | 46 | 2460 | 1518 | 3978 | 80 | 5 | 85 |
| 小学校 | 156 | 29582 | 18469 | 48051 | 972 | 700 | 1672 |
| 中学校 | 21 | 6874 | 4693 | 11517 | 208 | 215 | 423 |
| 高等学校 | 10 | 2887 | 1580 | 4467 | 103 | 136 | 239 |
| 大学 | 1 | 300 | 45 | 345 | 9 | 23 | 32 |
| 国立教育研究所 | 1 | 105 | 69 | 174 | 16 | 9 | 25 |
| 教師養成学校 | 2 | 103 | 19 | 122 | 24 | 8 | 32 |
| その他 | 8 | 1021 | 287 | 1308 | 67 | 15 | 82 |
| 合計 | 245 | 43332 | 26680 | 69962 | 1479 | 1111 | 2590 |

第7次5カ年計画書より、項目分類および数値の一部を改変して引用した

就学率という数字を信頼するとして、教育省の副大臣ツェワン・リシン氏と面談したときの話では、1995年現在の就学率は72パーセントにまで上昇しているという。毎年1%ずつ上昇しているということになる。

教育省副大臣から直接聞き書きした1995年現在の最新情報では、外国人教師の占める割合は全体の32%にまで減少しつつある。つまり3人に2人は自国人で教師をまかなえるようになった。首都ティンプーには、公立14校・私立5校があり、合計の生徒数は14,000人にもものぼるという。全国の人口は公称64万人で、全国の生徒数は85,000人に達しているそうだ。ただし、細かく計算して数字のディテールをつきあわせてみると矛盾がある。所詮、人口統計の正確でない概数と考えるべきだろう。

学校の内訳は表1のとおり、地域学校（コミュニティー・スクール）と呼ばれる3年生までの小学校が46校で、6年生までの小学校（プライマリー・スクール）が156校。この2つで202校になり、全体の学校／教育機関数245の82%を占める。すなわちブータンにおいては、学校教育すなわち初等教育なのだといえる。初等教育は、地域に根ざした地域学校と、寄宿舎をそなえた小学校に分けることができる。そして、この初等教育における教育プログラムこそ、ネイブと呼ばれるものである。

初等教育以後の高等教育としては、中学校（ジュニア・スクール）21校、高等学校（ハイスクール）10校、そして大学（カレッジ）1校しかない。中等・高等教育は国内的にはまだ整備されていないといえる。

図1に、ブータンにおける学校／教育機関の分布を示した。一見してわかるように、北部の山岳地帯には、ほとんどまったく学校がない。いかに人口密度の低い地域とはいえ、未就学児童の数はかなりのものになるだろう。実際、7FYPでは、1997年までに就学率88%を目指して初等教育の急速な充実が図られているが、地図を見ればそれが容易でないことは想像がつく。

生徒数ではっきりしていることは、常に男子が女子の約1.6倍いることである。男子の場合、さらに約4000人が、僧侶としての宗教生活を送りつ

つ伝統的な教育を受けている。したがって広い意味で就学している男女の比は、実際にはさらに拡大していると言ってよい。興味深いことに、この生徒数の男女比は、ネパールの山間地ジュンベシ学校の1年生から10年生まで307人の性比1.53:1（古川、1996）と、奇妙なほど一致する。

ブータン全体とネパール全体とを比較しても、この性比の数値はあまり変わらない。ネパール政府の統計によれば、小学校の就学児童数は合計で2,788,644人。そのうち男子が1,784,834人で女子が1,003,810人である。したがって男女の性比は1.79:1ということになる（H. M. G. Ministry of Education and Culture, 1990；村上、1993）。全体的に見て、ネパール・ヒマラヤとブータン・ヒマラヤの山間僻地という自然環境の類似、さらに両国の生業の類似を考えると、こうした生徒の性比の一致は偶然のものではないだろう。

教師数については、ブータン自国人と外国人（ほとんどがインド人）の比が、小学校から大学に移行するに連れて逆転することである。すなわち、地域学校では90%以上が自国人教師なのに対し、小学校では、教師において自国人が占める割合が58%で、中学校では逆転して49%になる。高校ではさらに低下して43%になり、大学では28%でしかない。

生徒数に対する教師数の割合を見てみよう。地域学校では1人の教師に対して47人の生徒数である。小学校では教師1人に対して生徒28人、中学校では27人、高等学校では19人、大学では11人と、単調に減少している。地域学校における教育環境を、たとえばこの教師対生徒比が示すように、ふつうの小学校並に改善することが、ブータンの近未来の初等教育にとって急務と言えよう。

ブータンの学校教育制度として、高等教育の場としては、大学以外に教員養成学校2校や、その他としてとくに国語（ゾンカ語）教師の養成をめざした学校（Sumtokha Rigney School、生徒数676人、教師数26人、1990年現在）などがある。ブータンの教育の根幹である初等教育に焦点を当てた本稿では、こうした高等教育の現状と将来については、ここではこれ以上の言及をとどめたい。

6 小学校（プライマリー・スクール）

ブータンにおいては、小学校（プライマリー・スクール）が学校教育の基幹である。小学校には、PP（プレ・プライマリー）と呼ばれる幼稚部が併設されている。このPPの上に、1年から6年までである。いわば、この合計7年間の学校教育で初等教育の終了とみなされる。実際に、小学校を卒業して中学校に進学する生徒数は、表1からもわかるとおり、1/4以下であると推定される。小学校を出ればもう一人前のはたらきが期待される、一時代前の日本の状況を彷彿とさせる。

教育制度は、インドの教育制度をほぼ踏襲したかたちになっている。PPと呼ばれる幼稚部1年、小学校6年、中学校4年、高等学校2年、そして大学が3年である。

小学6年生のときに、全国一斉の共通テストがあり、その成績によって上級の学校への進学が決まる。さらに10年生すなわち中学校の最終学年でICSE（Indian Certificate for School Examination）でインドと共通する資格試験を受ける。さらに12年生すなわち高等学校の最終学年でISC（Indian School Certificate）と呼ばれる資格試験を受ける。

これに合格したものが、インドのカルカッタ大学の分校でもある、カンルンにあるシェラブツェ大学（Sherubtse College）に進学することができる。この学校はインドのデリー大学と提携している。ただし文化系の限られた学部しかない。したがって大学以上の高等教育を受けるためには、主にインドに出ることになる。奨学金の被支給者は毎年およそ50人だという。最近では、数こそ少ないが、アメリカやタイへの留学もある。

話は横道にそれるが、こうした発展途上国からの留学生の場合、せつかくの高等教育を受けてもそれを活かす道が故国に少ない。それに対して、先進国の方が暮らしは便利だし、高学歴であればしごとの機会も多い。そうしてやむなく留学先にとどまるケースが多い。しかしブータンの場合は、ごく少数の例外的な者を除くと、必ず故国に帰ってくると言う。仏教的な倫理観と緊密な家族の絆が背景にあるのだろう。

小学校（プライマリー・スクール）の例として、サムテンガン小学校（図2）を訪れた。ブータンの中央部に、国の東西を結ぶ主要道路が走ってい



図2 サムテンガン小学校の外観

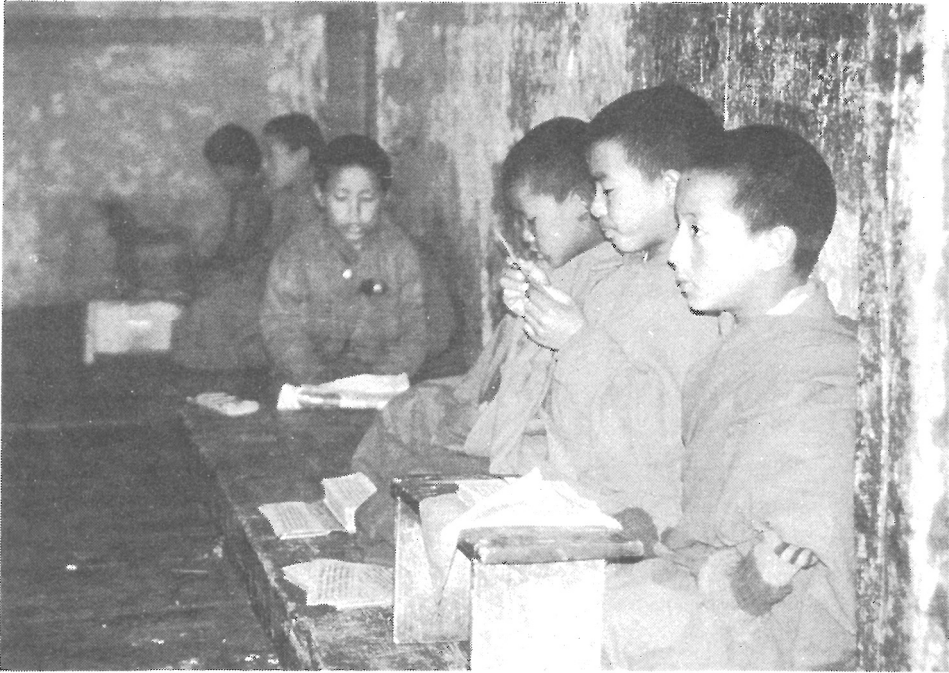


図3 ガンテイの寺院で読経する子どもの僧侶

る。ウォンディボンダンでその幹線道路から離れて北に入った。車道を離れて、ウマ5頭に荷物をのせて、尾根沿いに登り始める。ゆっくり登って3時間。サムテンガンという名の村に着いた。

サムテンガン小学校には、PPと1年生から6年生まで。生徒数360人、この場合は男女比でいうと、女の子の方がやや多いと言う。不思議に思ってたずねると、男の子の場合は坊さんとして寺に行く者がいるからだそう（図3）。卒業するとトンサにある中学校に進学する。さらには、ジャンゲン、カリン、モンガル、プナカなどの高等学校に進学する者もいると、教師が誇らしげに答えてくれた。

日本の学校のイメージでいうと、近在の子どもが通ってくるわけだが、ブータンでは半数以上は通えない距離に家があって、寄宿舎で生活している。学校の絶対数が少ないのと、人口密度が低く家々が広域に散らばっているからである。この学校の場合も、校庭の北縁に平屋建ての女子の寄宿舎、西縁に2階建ての男子の寄宿舎が建っていた。

教師の数は合計10人である。生徒数と教師数の

比でいって、36:1なので、平均的な小学校といえるだろう。ゾンカ語という国語を専門に教える先生が2人。あとの8人はネイブ・ティーチャー（NAP E teacher）といって、国語以外のすべての教科を担当する。校長はニマ・ツェリン先生で43歳だった。教師の給料はだいたい3000ヌルタムだと聞いた。

学校は1980年代に創立された。はじめは地域学校（コミュニティー・スクール）だったが、その後、小学校（プライマリー）に格上げされた。校舎は2階建て。ひとつだけである。別棟に図書室がある。校庭を隔てて、2階建ての男子用の寄宿舎と、平屋の女子用の寄宿舎がある。男子用の寄宿舎の1階が食堂で、となりに厨房が建っていた。寄宿生の場合は3食をここでまかなう。授業料も無料だが、寄宿料も無料である。WFP（ワールド・フード・プログラム）から、生徒あたり1日300グラムの食料の援助がある。

寄宿舎を覗いて見て驚いた。ほとんど何もない。大小の部屋がいくつかあって、がらんとしている。みな板敷きである。壁に寄せて個人の荷物が置か

れている。どれも判で押したように毛布1枚と身の回りの品を入れる小箱がひとつしかない。小箱の蓋を開けて覗かせてもらった。身の回りの品といっても皿くらいしかない。目測で測ってみると、平均して、およそ6畳くらいの広さの部屋に10人くらいが寝起きしている勘定になる。冬の寒さがしのばれた。

校長先生の話では、この学校では12月22日から3月10日まで、長い冬休みがある。春3月になると新学期だ。ただし長い冬休みがあるかわりに、夏休みはない。

授業は、月曜から金曜までが1日8時限。土曜日は2時限。合計して1週間に42時限の授業時間がある。国語（ゾンカ語）、英語、算数の3教科が主要な教科で重視されている。そのほかに地理・歴史・科学などが教えられている。この学校の6年生の場合、英・数・国が8時間、地理・歴史・科学が6時間だという。ふつうはさらにその他に、体育というか遊びとして、サッカーをしたり、男は洋弓、女はダンスをしたりする。

実際の1日のようすを見学した。朝8時25分、

予鈴の鐘が鳴って、児童らが三々五々登校してくる。学校の校庭のすぐ外側の路傍で、駄菓子屋が店開きしていた。生徒たちがアメやせんべいのようなものを買って懐にねじこんでいく。

8時40分、本鈴が鳴った。男女2名の児童が全校生徒の前に出てきた。他の児童は前を向いてほぼ方形に整列している。校長と先生たちは児童に対面して位置する。まず、仏教音楽なのだろう、全員でお経のような歌を唱和する。それに引き続いて国歌斉唱。校長の訓話はなかった。男女ともに文化的伝統ののっとり民族衣装の制服である。男は「ゴ」、女は「キラ」という、日本の着物に似た服である。この学校のゴは縦縞、キラは横縞だった。学校ごとに指定の布が違って、見る人が見れば一目でどの学校かわかる。

4年生の国語（ゾンカ語）の授業を参観した（図4）。ほんとうは32人の生徒だが6人欠席して当日は26人。男子が14人で女子が12人だった。ほかの教室もそうだが、男女は席を分けている。このクラスは、教室の先生に向かって前3列は女子、後ろ3列は男子の席になっていた。この4年生



図4 サムテンガン小学校の国語（ゾンカ語）の授業風景

のクラスは机に長椅子だった。教室は窓が小さくて薄暗い。もちろん電灯はない。

教室に一步入ると、生徒が全員一斉に起立して「グッド・モーニング・サー」と言う。一瞬ひるんでしまう。

「スイト・ダウン・プリーズ」と言うと、「サンキュー・サー」と全員が唱和して座る。

どの学年のどの部屋に行っても、またどの学校でもそうだった。じつに規律正しく、礼儀正しく振る舞える。ちなみに国語以外は、小学校から英語で授業をしているので、どの子も英語がうまい。見渡すと、ポロポロの土壁に、各学年それぞれに趣向を凝らしていろいろな教材が貼ってある。たとえば、ブータン全図と世界地図などがかけられている。

国語の授業は作文だった。ちょうど国王の誕生日の休日明けなので、休日に何をしたか、ゾンカ語で作文する。先生にあてられた子が立って、自分で書いたその作文を読んでいた。

2年生の部屋をのぞくと、そこはイスがなく、横に長い座り机だけがあって、子どもたちは板敷きの床にそのまま腰を下ろしていた。ここも壁はポロポロ、窓も小さい。だから昼でも室内はほの暗くひんやりしている。総じて設備は貧弱だが、壁に貼ってある教材のようすなどから見て、かなり程度の高い学習をしていることがうかがえた。何よりも、授業を受ける子どもたちの眼の輝きが印象的だった。

少し残念なのは、あまりに部屋が暗すぎて、これでは眼が悪くなってしまうと思えたことだ。実際、ノートに眼をつけばばかりにして字を書いている子が目立って多かった。もっとも、眼鏡をかけている子は1人もいない。

この山間のサムテンガン小学校が、山国ブータンの典型的な小学校だろう。後日ティンブーで、もっと大規模な小学校を見学した。ジルクカ小学校。全校児童数は970人の大規模校である。海外青年協力隊で赴任している岩本先生はあいにく休暇中だった。ここは寄宿舎はなく全員通学である。生徒がたくさんいて、1クラスの人数も50-60人になっている。その点を覗けば、PPから6年生までの学年も、ネイブに依拠するその教育のシステムも、きわめてサムテンガン小学校に似ていた。

7 ネイブ (NAPE)

ブータンの初等教育のカリキュラムは、歴史的にはおおむねインドのものに準拠していた。しかし最近では、ブータンの風土や歴史や価値観にあわせた新しい教育プログラム (NAPE) が推進されている。

NAPEとは、すでに述べたように、The New Approach to Primary Educationの略称であり、「ネイブ」と発音する。ブータン独自の初等教育の教育プログラムのことである。ネイブの考案は、海外援助活動で広く知られるイギリス版の海外青年協力隊的な機関・VSO (Voluntary Service Overseas) の中から生まれた。実際にはイギリスだけでなく、アイルランド、ニュージーランド、カナダの4カ国から派遣されたボランティア教師、および国連ボランティア機構 (UNV) から派遣されたボランティアの協力もあって実現した。

ネイブ・プログラムが産み出された背景は3点に要約できる。まず第1に、ブータンで西欧流の宗教を加味しない普通教育への志向が近年になって急速に増大した。第2に、ブータンの側の若い教師にそうした教育に関する経験が不足していた。これが長い間植民地化された国だったなら、たとえ植民地が解放されたあとも、西欧の旧宗主国とのあいだに文化的な絆を強くもっていたらうし、その絆を通じて現代的な初等教育の手法に関する知識ももっただろう。ところがブータンは植民地化されずにすごしてきたので、西欧の教育に関する息吹に触れないで来た。したがって、教師の側に経験がない。第3に、ブータンの普通教育において、英語が教育現場で使われたことである。つまり、英語を母国語とし、現代の初等教育に通曉した西欧社会のボランティアが、入り込みやすい素地がブータンにあったのだと言える。

では、現代の、宗教を基盤としない普通教育における、初等教育の目的とは何か。それは、子ども自身が物事を独自に進める能力を涵養することだ、とネイブは考える。教師は既存の知識や価値を一方的に教え諭すのではない。示唆を与え、はげますことによって、子ども自身が正しい方向に向かうようにし向ける。



図5 NAPEプログラムによるグループ学習

ティンブーのジールカ小学校にて

象徴的な姿を例に言えば、クラスの子どもたちに向かってしゃべるのではなく、つねに子どもたちのあいだを歩き回り、子どもたち自身が物事を観察し、実行し、発見するのを助ける。わけのわからない数学の記号を使う代わりに、つねに具体的な物を使って分数や集合を教え、記号の背景にある現実気づかせるようにし向ける。それが測量のことだとしたら、抽象的な問題を机上で出すのではなく、実際に教室や運動場の実態を測量する。しかもブータン固有の測量具を用いて測らせる。遠い異国の地図を書いたり、その王様が誰だったとか、戦争がどうしたとか、を暗記するのではなく、教室から外に出て、ときには学校からさえも外に出て、実際に自分たちが住む地域のことについて具体的に自分の眼でその地理を知り歴史を学ぶ。そうして自分たちがくらす環境(Environment) というものに眼を開いていく。

そうするためには、子どもたちは教室でつねに自由にふるまえなければならない。席を立てて移動する。静かに隣の人とおしゃべりする。グルー

プでしごとをして、互いに助け合う(図5)。教室や廊下の書棚にある辞書や本を見に行ってもかまわない。これこそ現代の西欧的な初等教育の理想とする姿である。もちろん19世紀の西欧諸国にあっては、こうした教育は考えられない。一言で要約すると、「子どもたちの自発的な行動を基盤にした初等教育(an activity-based learning model of primary education)」という理念である。

ネイプと呼ばれる教育プログラムの詳細については、原著(Collister and Etherton, 1991)を参照されたい。ネイプ・プログラムによるシラバス(授業概要)の実際を紹介すると、さらに具体的なイメージがつかめるのだが、紙幅のつごうでこれも割愛したい。要するに、国語、英語、算数、そしてEVS(環境教育)の4教科が、総合に関連づけられ統合されて授業が進行する。教師用の教則本としては幼稚園PPから3年生までのものが、国語を除いてできあがっている。参考のために、そのシラバスの概要だけを表2にまとめた。

前述の2つの小学校と、後述する1つの地域学

表2 NAPEにおけるPPから3年生までの授業のシラバス

| 学年 | 英 語 | 算 数 | 環境教育 |
|-----|--|--|---|
| PP | 100語 見て・発音する教授法 Sの発音の導入 7つの読み物 ニュースを言わせる 自分の考えを述べる | 0から9までの数 長さと重さ 実際のお金で買い物 ただし9ヌルタムまで 時の系列、曜日 形の識別・分類 | 5つのトピックス わたしのクラス わたしたちの食べ物 花 わたしとその家族 家にいる動物 |
| 1年生 | 160語追加 引き続きオーラル重視 ほとんどの文字の発音 文脈を置いた練習開始 10の読み物、各人読書 すべての大文字小文字 短文の作製 | 99までの数の加減算 加算による乗算の導入 1/2、1/4の導入 非標準の物を用いた計測 100ヌルタムまで使う 時間、月の理解 形の命名、対称線の発見 | 6つのトピックス 家庭 人々のしごと 野生動物と家畜 土地の主要な産品 水 この地域の植物 |
| 2年生 | 語の追加、疑問文など はなしことばの完成へ 文字の発音の反復 文脈を利用した単語習得 10の読み物 英語の歌、詩、ゲーム 字を書き始める | 999までの数 加減乗除と分数 m、kg、lの導入 時計を5分きざみで読む お金の問題を作る・解く 立体の形の命名 グラフを作る・解釈する | 6つのトピックス わたしの村 からだ 天候 野菜 動物 道具、機械 |
| 3年生 | はなしことばの発展 ひとりで本を読む 未知の単語を含む読み物 発音の反復 文脈を利用した学習 未習の単語を見て発音 書く技術をさらに強調 | 9999までの数 4桁の加減算 3桁と2桁の乗算 3桁を1桁で割る除算 分数と除算、分数加減算 mとkmなどの関係理解 貨幣に関する加減乗除 | 6つのトピックス 学校 くだもの 建物 輸送 鳥 お祭り |

校で、こうしたネイブに基づく実際の授業の一端をかいま見ることができた。要するに、教室の雰囲気は、グループ学習の「のり」である。先生が教壇から生徒に向かって一方的に授業するのではなくて、子どもたちは5-6個のグループに分かれて机を囲んでいる。先生は、その子どもたちのあいだを縫うように歩きながら適切な助言を与える。こうすると、なるほど子どもたちの側に授業の主導権がある。かれらがいきいきとそれぞれのペースで、しかもお互いに助け合いながらしごとを進めていく雰囲気が認められた。

8 サムテンガンの小学生との会話

サムテンガンの村のはずれの松林にテントを張って、2泊3日をそこですごした。西の方には新雪をかぶった山が遠望できる。ここが標高2500mくらいだから、冠雪した山は4000メートルほどだろう。夕方、金星が輝き、夜は満天の星だった。

このキャンプ地で、サムテンガン小学校の3年生の女の子、プブ・ゲムと知り合いになった（図6）。キャンプ地の近くの家にすむ子である。両親は農民だという。両親が子どものころはまだ学校がなかったので、両親ともに学校には行っていない。だから母は字が書けない。兄と姉がいるが、ともに小学校を出て遠くの学校に寄宿している。

ブータンの山村の少女の心の世界の一端を知る

うと思って、プブに次のようないろいろな質問を試してみた。

Q：何を見るのが好き？

絵が好き。

牛や雄鶏の絵が得意だと言う。じゃあ描いて見せてと言って、ノートとボールペンを渡した。ニワトリと雌牛の横向きの絵を描いてくれた。他に好きな絵を描いてと頼んだら、正面を向いて立っている少女の絵と、勢いよく水が蛇口からほとばしり出ている水道の絵を描いてくれた。

Q：何を聴くのが好き？

- 1、ジャーッと水道から水がほとばしり出る音。
- 2、人々の話し声
- 3、雄鶏がコケコッコと鳴く声

Q：お手伝いするしごと、何が好き？

- 1、料理

料理は何が得意なの？ スジャを作る。スジャって何？ スジャはね・・・と説明してくれた。

- 2、小さな薪用の木を切り分けるしごと
- 3、母や姉がすることなら何でも

Q：嫌いなしごとは何？

- 1、野良しごと

何で野良しごとが嫌いなのとたずねたら、手足が汚れるからだと言った。

- 2、雌牛の世話をする

何で嫌いなものとたずねたら、ちっとも言うことを聞いてくれないで、すぐあっちこっちに行ってしまうからだそうだ。

- 3、苗を苗床から移し替えるしごと

Q：好きな教科は？

算数、とくに足し算や引き算が好き。

嫌いな教科は？

ゾンカ語。字がむずかしいから。

Q：何をして遊ぶのが好き？

サッカーやバレーボール。

将来は何になりたいの？

学校の先生。算数を教えたい。

これらの問答はすべて英語でおこなわれた。さすが幼稚園から英語をとくにオーラルを重視して学んでいるので、発音も正確だし、しっかりと話ができる。

プブと話をしている、第一著者の松沢は、アメ



図6 プブと母親



図7 チャルナ地域学校の生徒たちと先生

リカでのアーミッシュの学校での見聞を想起した（松沢、1987）。アナバプティストの一派であるアーミッシュの人々は、自動車に乗らず馬車に乗り、電気を使わない伝統的な暮らしを現在も守っている。子どもたちの暮らしの中で、男の子は父親を、女の子は母親を手本に、いわば親の後ろ姿を見ながら育つ。そして家庭を営む中で、子どもなりに期待されるしごとや役割があって、それが伝統的な暮らしを受け継いでおとなになっていくステップになっている。

じつは、プブにした質問のほとんどは、アーミッシュの子どもたちにしたものと同じである。まったく民族的な出自を異にし、何の文化的な連関もない、ブータンの高地民とアーミッシュに、共通したくらしの構造がかいま見える。それは一見多様な文化的な変異を超えてヒトがヒトとして普遍的にもっている文化的存在としての共通項を見せているような気がした。

9 地域学校（コミュニティー・スクール）

コミュニティー・スクールは、村立の小さな小

学校とおもえばよい。地域共同体（コミュニティー）が出資して維持する学校である。地域に根ざした学校なので寄宿舎はない。歩いて1時間以内の距離から通ってくる、生徒数が最低30人以上が必要である。教育省から派遣された先生が1ないし2人いる。

地域学校（コミュニティー・スクール）を訪れた。一見すると、これまで見た小学校を、さらにひとまわり小規模にした感じである。ティンブーとパロの中間に位置するチャルナの地域学校を訪問した（図7）。

一般に、地域学校にはPPから小学校3年生までしかない。しかも異なる学年を1教室に入れた複式学級をしていた。チャルナ地域学校のばあい、先生は政府から派遣された2人だけだった。校舎もひとつだけしかない。寄宿舎はない。子どもはみんな通ってくる。平均して30分から1時間の通学時間。遠いところの子はゆうに片道1時間以上かかるという。たしかにまわりを見渡すと、ぐるりと山に囲まれて、人家らしいものは見えない。

生徒の数は72人。最近の傾向で言えば、この地

域住民の子どもは約80%が就学するという。3年生17人のうち14人までが、近くのカサドラブチュール小学校の4年生に編入して進学するという。

ユニセフ (UNICEF) の援助で、校舎の窓に透明のアクリル樹脂のような素材でできた「ガラス」が入っていた。少しは風の冷たさを防げる。あいかわらずどこも似たり寄ったりで、板ぶきの床だ。冬はさぞかし寒かろう。この学校の冬休みは、12月25日から3月1日だと言う。

生徒が先生を手伝って、昔懐かしい謄写版で、プリントを刷っていた。規模が小さい分、先生と生徒の距離も小さくて、「村の分教場」という雰囲気がある。

校庭の隅に、先生の家がある。お茶に招かれた。干し飯をお茶請けに、お茶をいただく。ウグエン・ニデュップ先生。トンサ生まれの34歳。奥さんはパロ生まれ。もともとはプンツォリンの高等教育機関である9年制の高等工芸学校で、建築工になるべく勉強した。でも職がないので、1981年にパロの教員養成学校で2年間研修を受けてネイプをマスターし教師になった。1984年から教職に就き、この学校は来て4年目になる。まだ子どもは小さい。給料は3765ヌルタム。若い20歳くらいのもう一人の先生は、ゾンカ語の先生で、給料は3000ヌルタムだと言う。

ニデュップ先生の家にはいると、まず玄関兼応接間があって、左が台所、右が寝室になっている。質素なつくりの家だ。それにしても、国全体が貧しい山村のような暮らしの中で、こうしてコミュニティが校舎を建て先生の家を建て、教育に投資する。その熱意はきわめて高いと思った。

10 高等学校・YHS

首都ティンブーのヤンチェンブー・ハイスクール (YHS) を訪問した。12年生のクラスまでもつ、ブータン屈指の高等学府である。現王家の子弟たちもここに学んでいる。生徒数は千人に近い。そのうち女子が約600人で、男子の数を上回っているという。

ティンブーの市街とは川を挟んだ対岸の高台に、瀟洒な建物が建ち並んでいる。先生はインド系の人が多い。背広にネクタイをしている。生徒は、ブータンの他の学校と同様に、日本の着物に

似た民族服を着用している。みなこざっぱりしていて、家も裕福なのだろう。

校舎中の設備も整っていて、机と椅子がそろっている。授業の妨げにならなければ自由に見て回って良いという許可を得て、構内をぶらつく。校庭でたまたま言葉を交わした2人の女学生に連れられて、彼女らの10年生のクラスを見学させてもらった。

休み時間も教室に残って自習している者が多い。ノートを見ると、かなりむずかしい物理の問題をやっている。案内してくれた2人は、それぞれ、学校の先生と看護婦になりたいと言っていた。ブータンの明日を担うエリートたちが集う場所というかんじがした。

せっかくの機縁なので、求めに応じて自己紹介をして、日本の住所を書き残した。後日、ひとりの生徒から手紙が来たが、10年生、すなわち日本の高校1年生とはとても思えない流麗な筆跡で、つづりのまちがいがいもなく、意を十分に尽くした内容だった。考えてみれば、外国語とはいえ、PPのときから10年以上にわたって学び続けた英語である。しかもネイプ・プログラムに沿って、オーラルから入り、適切な指導を受けてきた。当然と言えば当然の成果だが、ひるがえって日本の英語教育の現状に思いを深くする。

11 近代化と海外援助

ブータンの人々の暮らしはけっして豊かではない。が、けっして貧しくもない。身ぎれいで、礼儀正しい、感じのよい人たちが多い。しかし、国内を旅して眼にするのは、こうしたブータン人とは別の人々がブータンにはたくさんいるということだ。

まず、道路は、インドの会社が請け負って補修している。ネパール人が数多く働いていた。ティンブー郊外の下水処理施設の建設工事は、オランダの援助だ。実際にはインドの会社が受注して、バングラデシュからの出稼ぎを多く雇って工事している。そのほかにもフィリピンや中南米からの出稼ぎもいた。

国連の開発プログラム (UNDP) をはじめ、各国の援助が人口わずか60万人のブータンに注がれている。ある意味では、海外援助漬けの国だと思

った。

日本も、故人になった西岡京治さんが生涯をかけて開いた実験農場がある。そこで普及させたりんごなどの果樹が、インドへの重要な輸出作物になっている。マイクロ波を利用した通信・電話システムも日本の援助で完成しつつあるという。日本の海外青年協力隊も、現在34名が常時駐在している。他の国々に派遣されている数と比較して、対人口比で考えると、これは途方もなく多い人数である。

ブータンへの海外援助は、他のどの国で見たよりも手厚いと思う。そのからくりは、「国」という単位で援助が計られるので、小さいけれども国家であるブータンはトクをしているということなのだろう。ちょうどアメリカの上院では、テキサスだろうがコネチカットだろうが、州の大きさにかかわらず、上院議員の数が1というのと似ている。

ブータンの近代化は、海外援助という推進力を得て、国王親政という舵取りによって、成り立っていると実感した。さらにそうした政治体制の基盤に、何世紀にもわたって受け継がれてきた、仏教を基盤とするブータン固有の文化や、家族の絆をたいせつにするくらしの伝統がある。

一方で、インドと国境を接する南部ブータンには、ネパールからインド経由で入り込んできたいわゆるネパール系ブータン人がその数を増している。それだけでなく、出生率がかなり違って、ネパール系ブータン人の数がさらに増加傾向にある。また前述したとおり、出稼ぎの外国人労働者も街に満ちている。一方で、教育が普及したからと言って、その高度の教育に見合う労働の市場がじゅうぶんには形成されていない。適当な就職がないまま、ブラブラしている都市遊民の姿をティンパーでも見かけるようになっている。

将来を考えると、こうした学校の外の世界の変化を見据えないと、ブータンの学校教育の明日は論じられないと思った。ひるがえってみると、それは日本でも同じだろう。学校のあり方は、その社会の縮図でもある。ただブータンの場合、国の規模が小さいので、政治・経済・教育の全体に眼を届かせて、その変化のようすの全体像を理解することが可能だ。ブータンを、生態学的・文化的

なまとまりをもったひとつの系と考えると、それがどのように変容していくのか。ぜひじっくり見ていきたい。

12 結びに代えて：フィールド教育学への展望

教育学からの距離はごく近い者もかなり離れている者もいるが、それぞれ分野を異にする5人の研究者が、同じ対象を異なる背景と異なる視線で見ることによって、新しい像を結ぶ。そんなことを夢想してブータンの学校教育の現場を体感するフィールド調査に出た。フィールド調査は、自分の眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、手で触り、舌で味わったものを、克明に記録にとどめる作業だ。いわば、ネイブ・プログラムの基本理念や発想と軌を一にしている。書かれた書物の知識を一方向的に詰め込むのではない。自分の足で歩き回り、探し回り、見つけた物にあれこれ探りを入れて自分なりに納得する結論を得る。

それが、対象の科学的な理解であるためには、複数の人間が繰り返し違った角度から検証して、理解の妥当性を保証する必要があるだろう。その点で、複数の人間の異なる視線を交錯させて対象を認識するという、この研究チームが構想としてもつ対象の多元的な理解のしかたは、ある程度有効だったと思う。また何よりも、当人たちにとってエキサイティングな場だった。ふだん時間空間を共有しない異分野の研究者が、今回の調査で言えば、「ブータンの初等教育」というひとつの対象をさまざまに見据えた。

今回の調査から得た感慨を一言で要約すると、教育の現場で、ネイブのような「学ぶ側の自発的・主体的な取り組みを基盤とするアプローチ」が有効に見えた。それならば、「教育」を対象とした学びの活動においても、対象に主体的に関わる行動を基盤にした営為が重要になってくるだろう。われわれは、この3年間のプロジェクトを通じて、フンザ・雲南・ブータンと、ヒマラヤの辺境を歩き回った。ことさらに人の行かない奥地を目指した。そこには、まだ「未知」ということばがそれほど手垢にまみれていない世界があった。まだ知らない世界を、もっと旅したい。フィールドからの発想は、そうした強い希求に裏付けられて、はじめて学に昇華する転回点に到るのだろう。

今しばらくは、方法も展望も定かでないままに、未知の土地を歩き続けながら、「教育」、「環境」、「文化」を考え続けてみたいと思う。

13 追記：隊の構成

隊員氏名と当時の所属と専攻は以下の通りである。

松沢哲郎（京都大学霊長類研究所）比較認知科学
辻本雅史（京都大学教育学部）教育史
成瀬哲生（山梨大学教育学部）中国思想
池上哲司（大谷大学）倫理学
出水明（喜多病院）ターミナルケア
カルマ・ドルジ（ローメン・ツアーズ）現地ガイド

14 調査の行程

1995年

11月9日 関空からバンコク
10日 バンコクからカルカッタ
11日 カルカッタからパロ經由ティンブー
12日 ティンブーからプナカ
13日 プナカからサムテンガン
14日 サムテンガン周辺
15日 ガンテイ經由ティンブー
16日 ティンブー
17日 チャルナ經由パロ
18日 パロからダッカ經由バンコク
19日 バンコクから関空

謝辞

今回の調査は平成7年度文部省科学研究費・海外学術調査（代表：堀了平、課題番号05041112、研究課題：高所住民の発達と老化に関する生理学的研究—環境適応とライフコース—）の援助を受けた。調査を支援いただいた研究代表者の堀了平先生、現地調査にあたって便宜をはかっていたり貴重な情報と助言をお寄せいただいた栗田靖之（国立民族学博物館）、河合明宣（放送大学）、月原敏博（大阪市立大学）の各氏に衷心より感謝いたします。なお現地では、ローメン・ツアーズのカルチュン・ワンチュクならびにカルマ・ドルジ氏、教育省副大臣ツェワン・リシン氏、農業省次官キンザン・ドルジ氏、ジグミー・ドルジ国立公園監視官タシ・ワンチュク氏ほか、JOCV山本昭夫、UNICEF小野田えり子、の諸氏から

ご教示いただくとともにお世話になった。記して、感謝申し上げたい。

参考文献

- 地球の歩き方編集室（1991）地球の歩き方フロンティア113・ブータン。ダイヤモンド社。
- Collister, P. and Etherton, M. (1991) Children Actively Learning: The New Approach to Primary Education in Bhutan. VSO/IT Publications, London.
- Dorji, K. (1995) Jigme Singye Wangchuck: A Monarch of the People. Tashi Delek, Nov-Dec 1995, 10-17., Druk Air Corporation, Thimphu.
- The Department of Tourism Royal Government of Bhutan (1979) The Permanent Mission of the Kingdom of Bhutan to the United Nations. Thimphu, Bhutan.
- H.M.G.Ministry of Education and Culture (1990) Educational Statistics of Nepal: Report of the National Education Commission. Kathmandu, Nepal.
- 堀了平（1986）偉大なる獅子マサコン峰登頂。講談社。
- 堀了平（1992）ブータンの生業資源。ヒマラヤ学誌、3: 113-122.
- 古川彰・結城史隆（1996）ヒマラヤ高地における環境保全システムと社会変容。TROPICS、5: 263-280.
- 今枝由郎（1994）ブータン：変貌するヒマラヤの仏教王国。大東出版社。
- 石田孝夫（1993）ブータンに図書館をつくる。明石書店。
- 岩本智美（1995）日本の生徒たちへの手紙From Bhutan. JOCV Monthly Magazine Crossroads, 9:30-32.
- 河合明宣（1994）ブータンの地方制度と開発の課題。ヒマラヤ学誌、5: 149-158.
- 小松義夫（1986）世界の子どもたち：7：ブータン、龍の子ティンレイ。偕成社。
- 九里徳泰・林美砂（1995）ブータン自転車旅行。山と溪谷社。
- 栗田靖之（1986）ブータン・ヒマラヤの生業形態の多様性。国立民族学博物館研究報告。11: 457-388.
- 栗田靖之（1992）ブータンの文化的アイデンティティーについて。ヒマラヤ学誌、4: 123-128.
- 栗田靖之（1996）ブータン・ヒマラヤの環境利用と開発問題。TROPICS、5: 281-296.
- 桑原武夫（1978）ブータン横断紀行。講談社。
- 松沢哲郎（1987）アーミッシュの学校。発達、30: 97-108.
- 松沢哲郎（1992）追悼・今西錦司、初登頂の精神：山登りと霊長類学。科学朝日、8月号、122-127.
- 松沢哲郎（1994）パミール高原学術調査概要：フンザの社会変容1973-1993。ヒマラヤ学誌、5: 3-16.
- 松沢哲郎・成瀬哲生・池上哲司・辻本雅史（1994）少数民族のアイデンティティー：中国雲南省の蒙古族の調査から。ヒマラヤ学誌、5:159-168.

村上満希子（1993）クンプ・ポルツェ村の小学校見聞：近代学校教育導入に関する若干の考察。ヒマラヤ学誌、4:103-110.

中尾佐助（1959）秘境ブータン。毎日新聞社。

西岡京治・西岡里子（1978）神秘の王国。学習研究社。

Planning Commission Royal Government of Bhutan (1991) Seventh Five Year Plan 1992/93-1996/97. Thimphu, Bhutan.

辻本雅史（1994a）フンザの教育事情と子どもたち。ヒマラヤ学誌、5: 39-52.

辻本雅史（1994b）中国領新疆パミール山岳地帯のキルギス族の教育事情：フンザとの比較から。ヒマラヤ学誌、5: 67-74.

月原敏博（1992）ブータン・ヒマラヤにおける生業様式の垂直構造。ヒマラヤ学誌、3: 133-176.

山本けい子（1991）はじめて知るブータン。明石書店。